

非認知能力を高める「主体的・対話的で深い学び」の実現

校長 川中子 登志雄

Prolog 教師主導の一斉指導の特徴

- 学習者が何を、どのように学ぶかは、教師が決定する
- 一人（または複数）の教師が、学級全体を一斉に指導する
- 座席は、全員が教師（前方黒板）を見る形（教師は教室の前方にいる）
- 生徒は、自席で姿勢良く座っていることが求められる（立ち歩かない、無駄なおしゃべりをしない等）
- 教師の発問に、生徒が手を上げて、指名された生徒が答える「1問1答」式
- 学級全員に対して、一律に同じ内容のことを指導し同じ活動を課す
- 教師の思うように活動する生徒が「良い生徒」
- 授業の大部分は、知識・技能の伝達に費やされやすい（正解が一つの問い、穴埋め式、Yes-Noで答えられる問い等）

1 「主体性」は、学習者が能動的(active)にならない限り発揮されることはない。

- 「学ぶべきこと」＝学習指導要領
 - これまで年齢別に指導内容が決められてきたが、今後いつ学ぶかは柔軟に対応できるようになる（学年制の見直し）
- 何を学ぶか（目標）、どう学ぶか、誰と学ぶか、どこで学ぶか（方法）… 子供自身が選択・決定する
- 子供を信じ、子供に委ねる 「待つ」ことの大切さ

2 一斉指導からの脱却を図るには

- 「教えない授業」
 - ・生徒が進める授業
 - ・教師の話す時間は10分以内
 - ・教師の役割は「見取りと評価」「チェック」
- （単元内）自由進度学習 → 環境を整え、生徒自身が学習進度を調整し、学習を進める
- PBL（探究型課題解決学習） → 「魔改造の夜」（NHK）<https://www.nhk.jp/g/ts/6LQ2ZM4Z3Q/>
- 反転学習 → 知識・技能の習得は家庭学習、学校では話し合いを中心とした課題解決学習

3 【生徒が主体的に進める授業】 横須賀市立長浜中学校 1年数学(2025年1月)

- 「学習課程(授業の進め方)」という考え方
 - 「(前時の) ふりかえり」→「今日の問い」→「今日の課題」→「(本時の) まとめ」の書き出し
 - 「キーワード」→「今日の課題の説明」→「個人」→「ぶらぶらタイム(協働的な学び)」→
 - 「発表(1)」(進捗状況の確認)→「ぶらぶらタイム」→「発表(2)」→「ぶらぶらタイム」
 - 「発表(3)」(ここでチャイム)→教師から(根拠の確認)
- 「学習リーダー」 生徒による授業の進行